

## 第4回公開講座

## 「南相馬市からの被災地「子ども支援」の報告」

日時：平成23年11月26日（土）

会場：新潟県立大学 1313講義室

共催：みらい子育てネット・新潟

講師：横田美明（南相馬市市長公室除染対策室係長）

青木理絵（南相馬市上真野臨時児童クラブ指導員）

進行：植木信一（新潟県立大学人間生活学部准教授）

## 幼児教育課子ども企画係からの報告

南相馬市市長公室除染対策室係長の横田美明と申します。実は、3月11日、被災時には、幼稚園、それから保育所、それからきょうの話題の中心になりますが児童クラブ、それらを管理、あるいは運営をしている幼児教育課というところに籍を置いておりました。私の、幼児教育課に籍を置いていたときの最大のミッションは、保育所の民営化でした。こういった仕事も含めて、震災を迎えてどんなふうに変え方が変わっていったのかというあたりをお話いたします。

まず、震災の被害の状況ということが1点目です。それから震災前後の放課後児童クラブの状況。それから震災前後の学校教育の状況。震災後の放課後児童クラブへの支援。これらの事例を4つほどお話させていただきたいと思います。最後に支援への御礼にかえてということで簡単なまとめの話をさせていただきます。

## ●南相馬市の被災状況

南相馬市、実は4重苦になったというふうにいわれております。1つは地震であります。2つ目に津波。3つ目に原子力発電所事故。さらに原子力発電所事故に伴います放射能というものに対する風評被害というようなものが出て、4重苦にさらされたというふうにいわれております。ご存じの方が多いと思いますが、3号機の水素爆発が起きました。1号機と3号機の爆発の仕方が違うというのが、実は映像なんかを見ていただけるとお分かりになると思いますけども。1号機の爆発は、煙が横に広がっていくような形の爆発だったのですが、3号機の爆発と



福島第一原子力発電所3号機の爆発

いうのは、皆さんも見たことがあるかと思いますが、いわゆるキノコ雲のような爆発がありました。

3月15日から20日にかけて市民が一斉に避難をすることになります。その避難のときのようすです。バスに乗って避難をしていく姿です。すこし分かりにくいのですが、小さなお子さんが、バスタオルで完全に身を隠した形でバスに乗り込むところ。つまり、いかに放射性物質を体につけないかということを保護者の方が心配をされて、バスに乗り込まれて避難をしていくというような姿です。それから、バスのなかでスクリーニング。つまり、放射性物質が体に付着していないかどうかということを確認するというような作業をしているところです。このスクリーニングの作業をしませんと、避難をしても受け入れていただけないというような現状もありました。こういったような作業をしながら、市民はそれぞれに避難をしていったというような現状です。

当日3月15日から、その原子力発電所事故の影響を受けまして、一斉に南相馬市からバスで避難が始まります。15日から17日で約2,000人。18日から20日の第2弾で2,700の方が、バスで集団避難をし



ております。避難をしたのは、当然これだけの人数ではございません。ほとんどの方が、自分の車で、自分で目的地を決められて避難をしております。

南相馬市7万を超える人口であったわけですが、当時避難を終えた段階で、1万人まで減ったというようにいわれております。

それと南相馬市は、平成18年の1月1日に原町市、それから鹿島町、小高町という1市2町が合併してできた市でございます。たかだか7万人の人口のなかに、実は区というものを設けております。合併のときおのおの自治体が、自分たちで考えていた施策をどんどん実施をしていきたいということで、非常にめめました。自治区というものを大切に地方自治を担っていこうというようなことで、区というものを設けまして、おのおの各区で、自分の区の発展のために政策立案ができるような仕組みというものを作っております。合併をするときに、住民の一体感を作っていくということで苦労したひとつの表れであるわけです。今、ここで申し上げたいのは、実は、この合併をして5年がたったときに、間もなく市民の一体感が醸成される、あるいは、もっともっと醸成をしていかなきゃいけないといったときに、また分断をされてしまったという事実があるということです。つまり、原子力発電所事故に伴いまして、同心円状に引かれた20キロのラインと30キロのラインです。この20キロのライン以南は、ここを警戒区域というふうのちに設定をされまして、現在立ち入りが禁止されている地域でございます。20キロから30キロの圏内は、この9月の30日に解除はされましたが、緊急時避難準備区域ということで、避難をする必要はないけれども、病院とか、学校なんかは開いちゃいけません。常に、何事が

あったときにも、すぐに避難できるように準備をして生活をなささい、そういう地域です。30キロのライン以北は、なんの指定もない無指定地域というようなことになります。で、これが先ほど申し上げました旧自治体の境界とかなり近い形になっているのです。山のほうでちょっとずれてきますが、こちらのほうはあまり人が住んでおりませんので、人の住んでいるところというふうな部分に目を向けますと、元の合併以前の状態では地区設定がされてしまった。ここに特異性があるということを知っておいていただきたいと思います。

### ●放課後児童クラブの状況等

次に、震災前後の放課後児童クラブの状況をお話させていただきたいと思います。まず3月の11日。ほとんどの児童は保護者のもとに帰っていくことができいております。ただ、一部につきましては混乱があり、亡くなられた方、あるいはご家族が行方不明になられた方などがいらっしゃいまして、お子さんを守ってあげられる環境ではないというようなこともあり、一部に避難所で児童クラブの指導員がお子さんをお預かりするというような状況がありました。翌日以降、保護者の方に、ほとんどの児童は引き渡しをされて、児童クラブの指導員は、とりあえずその日のお仕事を終わるわけでありまして。

では、そこに働いていた指導員、被災をしたときに保護者に代わって子どもたちを見守った指導員はどうなったのかということなのですが。実は、南相馬市の放課後児童クラブの指導員、今日は青木指導員が来ておりますけれども、全員が、いわゆる人事管理上特に必要とする場合に、一会計年度を限度として雇用する職員いわゆる嘱託職員という立場の職員だったわけです。正職員ではなかったのです。事故発生によって当然、児童クラブの運営もできなくなりました。混乱のなかで、本来の業務以外の業務も割り当てられなかったということですね。もう市役所内部が混乱をしておりましたので、誰にどういう仕事をってもらうことが効果的かつ効率的なのかということ判断できるような状況ではなかった。もう、やるべきこと、目の前にあることをどんどん処理していくということぐらいしかなかった。だから、コントロールができなくなっていたということですね。それから指導員を含めまして、みんなが避



原発20キロの南相馬市内国道封鎖地点



難せざるを得ないような状況になっていた。結果的に皆さまが予測される通り37人おりました児童クラブの嘱託職員全員を3月31日付で、「雇用期間満了」としてしまいました。

後に、私どものほうで臨時に児童クラブを開設しましょうということで、3つの児童クラブを開設していくことになります。ところが、先ほど申しあげましたように3月31日付で、児童クラブを担ってくれる指導員を全員解雇している状況でしたので、どうやってその人たちを集めるかということで、非常に困った状況になってきたわけです。児童クラブの指導員、誰でもできるというような職業でもありません。子ども一人ひとりと向き合っ。特にこういう危機だから、そういうようなスキルがどうしても必要なので、経験のある人がどうしても欲しいというようなことで3月にこちらの都合で解雇するような状況になったにも関わらず、舌の根も乾かぬうちに、その指導員の方、一人ひとりにお電話を差し上げて、もう一度、職を担っていただけないかというようなお話をさせていただきました。

もう1つは、実施する場所がない。先ほど、申しあげましたように、学校を全部、その鹿島区というところの3つ小学校に子どもを寄せて運営をしておりまして、300しか予定をしていない児童数のところに500以上の方が入っているというようなことで、スペースが全くありません。そのスペースがないなかで、どうやって児童クラブをやるのかということで、体育館でやるところもあるし、それから小学校の体育館に8畳間ぐらいの小部屋があるのですけども、そんな8畳間ぐらいの小部屋を使って運営をしているところ。それからもう全然場所がなくて、しょうがなく、1年生の授業が終わったあと、その1年生の教室を使って児童クラブを開設しなければいけないというような状況もありました。非常に大変な状況のなかでしたが、なんとか3つの児童クラブを開設していくことになるわけでありまして。

平成23年の4月1日時点で児童クラブを利用する児童は600人を予定しておりました。しかしながら、このような状況のなかで5月に再スタートするときには56人(9.3%)の子どもたちを預かることでスタートをしていくということになります。今は、165人ということで、約3割近い数字の利用者が増えてきているというような状況になっております。

次に、児童クラブへの支援というものが、どうい



アートを通した心のケア

うものがあつたのかということについて、いくつかの例でお話をさせていただきたいと思います。1つはARTS for HOPEという団体さんと、MAYA MAXXさんという芸術家の方です。アートを通して、少しでも子どもたちの心のケアになればというようなことで、かなり大きな画用紙を用意していただきまして、そこで自由にお絵かきをしましょうというものであります。このARTS for HOPEにわれわれがいただいたものは、何だったのかと考えてみたところ、たぶんこれは「解放とダイナミズム」ということなのだろうというように私なりに思っておりました。

続きまして、漫画家の方が来ていただきまして、この漫画家の方々、被災後、漫画というのは子どもの文化なのだ。だから、たぶん津波などで失われてしまった漫画などを子どもたちに届けることによって、少しでも子どもらしい時間を持つことができるのではないかなというようなことで、東京のほうで漫画本や、あるいは文芸の本なんかも含めて皆さんに寄付をしていただいて、それを被災地のほうに届けているというような支援をしてくださっていた漫画家の方々です。そのお2人の漫画家と、お仲間が児童クラブに来て、それぞれの児童クラブの子どもたち1人ひとりに似顔絵のプレゼントをしてくれたというのが、この支援でありました。この似顔絵プレゼントからいただいたものは何かと考えたときに、子ども一人ひとりとじっくり向き合っ。会話をすること。たぶん、そういうことだったのだという



ように思っています。似顔絵を描きながら、好きな漫画は何だとか、好きなキャラクターは誰だとか、食べ物は好きなものはなんだ、地震は怖かったか、家族は元気か、数分間という短い時間ではありますが、その似顔絵を描きながら、そうやって子どもたちに直接話かけて、1対1で会話ができるという環境を作っていたというように思っています。

それから続きまして、NPO法人TOYBOXの発達支援ということでありまして、関西のほうで、不登校の児童なんかを集めまして、学校と同じような教育をできないかということで努力をされているスマイルファクトリーというところの代表の白井さんという方です。発達障がい児というのは、もう皆さんも単語としては知っていらっしゃると思います。一般に7%の子どもが発達障がい児だというようなことがいわれるようになっておりますが、南相馬市では、7%にはとどまらないというのが専門家の意見でございまして。では、そういう子どもたちが被災してどうなるかということは、これはもうテレビの報道などでもだいたい言われたことだと思います。避難所生活は残念ながらできないということで、何人かのお母さんと、私もお話をさせていただきました。避難所のなかで子どもが生活することの環境が厳しいということで帰ってこざるを得ないというようなお話をいくつかいただきました。当然、被災の状況になりますと、そういう弱いところが、さらにまた苦しい環境に置かれるということがあるので、そのことを阪神大震災のときに経験をされているというような関西のほうの皆さんが、発達支援に関する専門家の方々が交代で来ていただいて、児童クラブの子どもの状況などを見ながら、指導員にアドバイスをしてくださると、そのような事業を行って

いただいております。白井さんとその仲間の方々にいただいたものは、「安心」という言葉の一言に尽きるのだろうかと思います。

次に、ご存じの植木先生でいらっしゃいます。竹とんぼや竹笛なんかを作っていたいただいて、子どもたちと一緒に植木先生、同じ時間を共有していただきました。植木先生にいただいたものはなんだろうと考えてみました。たぶん植木先生にいただいたものは、「普段」ということなのだろうというふうに思います。普段行われていることが、普段やっていたことが、非常時にはできません。その普段というものを、少しずつ取り戻すために、いろんな活動をしていただけたというふうに思っています。

もう1つ重要なことは、実は、植木先生、何度も南相馬市のほうにお越しいただいております。つまり、これはやはり「普段の継続」です。被災をした者が、普通の生活、普段の生活を送るということは、ほんとうに難しいのだなというのは、われわれもよく感じました。それを時々普段にかえるのではなくて、継続をして来ていただける。そこで教えていただいたことを、今度は指導員たちが学んで、子どもたちに返していくというようなことが、この活動のなかで得られたものだなというふうに思っております。普段を継続していくことが非常に大切なのだと思うのです。

次に、植木先生にプロデュースしていただいた「夏休みコンサート風のカーニバル」のようすです。南相馬市の子どもたちは外で遊ばません。放射性物質が降り注いでしまっていて、どうしてもその放射線量というものが、一定程度ございまして。そのために学校も体育の授業も一切、外では行わないというような状況でありました。外で遊ぶことができない。ならば、夏休みも遊べない。それじゃあ、あまりにもかわいそうだということで、夏休みの機会、屋内で体を動かしながら楽しいプログラムはないかというようなことを、植木先生のほうにご提案をしていただきまして、こんなコンサートを実現していったということでもあります。これで言いたいことは、実は支えてくれた人がたくさんいるということでもあります。出演をしたのは、橋井晴彦さん主宰のアートオフィスポカポカさんです。植木先生にポカポカさんを連れて来ていただいた。そして、このコンサートを運営するためには、財団法人児童健全育成推進財団の力が必要だと。児童健全育成推進財団



児童クラブでの工作あそび





夏休みコンサート風のカーニバル

がこの企画を通すためには財源が必要でその財源はどこが出したかということ、財団法人こども未来財団がそこを支えた。さらにこども未来財団だけではなく、生活協同組合コープにいがたさんなどが、協賛をしてくださいます、このようなコンサートが可能になったということです。支援ってというのは、支援をする人がいて、さらにその人を支援する人がいる。さらに、そこを支援する人がいるという支援の連鎖であり、こういったことが非常に大切なのだなということ、このコンサートを通じて感じたわけであります。

### ●「子ども支援」から学んだこと

さて、最後になりますけども、被災したとき、子どもたちは一体何を失ったのだろうかということがあります。例えば遊びを失ったのかもしれない。コミュニケーションも失った。コミュニケーションというのは友達ってということだと思いますが。あるいは、笑顔が失われたというふうにも思います。3月11日以降、子どもは笑っていません。しかし今は笑っています。3月11日以降、子どもたちの姿たくさん見てきました。しかし笑っている子どもはいないということが現実でありました。笑顔がなかった。その他いろいろあると思います。夢だったり、あるいは趣味だったり。外で遊べないと申しました。空を失ったのかもしれないし、あるいは狭いところに押し込まれてしまって、空間を失った人もいられるかもしれない。家も失ったのかもしれない。お父さんやお母さんを失ったのかもしれない。児童1人ひとり、皆、失ったものは、たぶん違うのだろうなと思います。それを理解して補完をしていくという

ことが、子どもに対する支援なのではないかというように私どもは考えてきました。児童クラブでそれをやれるのは誰なのかと考えたときに、それは児童クラブの指導員以外にいないわけです。毎日毎日、子どもと接しているのは、学校にいれば学校の先生でしょうし、児童クラブに来れば指導員でしょう。それから児童クラブから帰れば、やはり保護者。直接子どもたちと接する人たちが、子どもたちの失ったものを理解して補完することができるのだというように思います。その子の名前を知り、その子の性格を知り、その子の失ったものを知る人たち1人ひとりが、その子のための思い考えるということが必要なだろうと思うのです。ただ、残念ながら実際にその子どもたちと直接会う人たちもみんな被災者でありまして、心に葛藤を持っている方が少なくなかったわけであります。したがって、支援する者への支援というものは、実は非常に大切なのだと思います。先ほどご紹介しました4つの例は、子どもたちに直接働きかけたばかりではないと思っています。今、申し上げましたように、子どもたちの支援を直接手がけるのは、ほんとに毎日同じ時間を過ごす者たちです。その人たちが、どうやったら子どもたちの心と向きあるのかということを含めて、先ほどご紹介をさせていただきました4つの団体あるいは人の皆さんには刺激をいただいたと思っています。

一方で、私たち市職員まさに私の立場ということになるとありますが、非常時に合った必要な事業というのは一体なんなのかということを実は教えられた。冒頭申し上げましたとおり私は、公立保育園の民営化をミッションとして幼児教育課に配置をされた人間であります。だからといって、今、民営化ではなくてやはり保育所は公立であるべきだというふうには考えてはおりません。しかしながら、その公的な仕事、公共的な仕事というものは失われなのだということが、今回はっきり分かった。3月31日で児童クラブ指導員全員を解雇して、その1カ月後にはまた、立ち上げなければならないような状況になって、必要なものは必要なわけですね。その必要なものを、どんな状況にあっても継続して運営できる仕組みというのが必ず必要なのだということに気がつきました。それは単純に、その民営化という言葉だけではないのだろうなということに反省をさせられたというのが、今回の私ども市役所職員として学んだことだというように思っています。



司会 横田さん、どうもありがとうございました。私が、南相馬入りしたときに、最初に対応してくださったのが、この横田美明さんでございました。大変な状況のなかで、外部からそれも突然入ってきた私に、大変丁寧に対応してくださって、大変適切なお対応をいただきました。そのなかで、やはり私自身も、横田さん、あるいは幼児教育課の人たちに対するたくましさを感じたものでございます。続きまして、上真野臨時児童クラブの青木理絵さんです。青木さんは、今の横田さんの報告のなかにもありましたように、3月31日付で一度、解雇という形になったと。ところが、その後も青木さんは、いつかまた児童クラブや児童センターが再開する日が来るだろうということで、自主的に児童クラブや児童センターに通いながら、崩れたような状態のなかを整理してくださっていたのです。そして横田さんのところにも通い指示を受けながら、そして現在、臨時児童クラブの指導員として再着任されたという、これもまた、大変なたくましさを持っておられる指導員でございます。

## 児童クラブの指導員からの報告

私は、今、南相馬市で児童クラブの指導員をしております青木理絵と申します。普段は子どもたちと一緒に生活をしているのですけれども、植木先生が3月11日の震災のあと、早い段階から南相馬市にかかわってくださって、何度も南相馬の児童クラブに来てくださるなかで、こうやって皆さんにお話しする機会をいただきましたので、私のほうからは震災のあと、児童クラブを支援してくださった方とのかかわりから見えてきた、その子どもたちのようすなど、今に至るまでの子どもたちの心と体の動きについてお伝えしたいと思います。

### ●児童クラブでの支援活動経過

児童クラブが始まると、学校の教室1年1組の教室のところに、私たち指導員3人が、「失礼します」と言って入っていく感じです。なので、放課後に宿題をやっていたりする隣で、指導員とお絵かきをして遊んでいたります。遊び道具も、教室なので置く場所がないので、洗濯かごのようなものに、遊び道具を入れて毎日私たちが持ち歩いて教室に入って



児童クラブの放課後のようす

いって、そこでその遊び道具を振り分けて、子どもたちに遊びを紹介したりして展開している形です。教室のなかで過ごすので、教室のなかでできるような遊びをしています。3時40分ぐらいになると、今度は体育館のほうに移動しますので、体育館のほうに行ったら、とにかくもう子どもたちは、体を動かしたいので、ドッジボールなどをして遊んでいます。ほんとは外で遊びたいのですが、まだ、外での活動ができないのでなるべく体を動かすためにはどうした遊びがいいのか工夫しながら、6時まで過ごしています。

3年生から6年生までは、下校時間から体育館に移動するまでの時間が短いので、体育館に来てから、床にちょっと宿題を広げてもう一度宿題をやっていたりとか、とにかく体育館に来たら、ランドセル放り投げて体を動かす遊びをしているのですが、体を動かす遊びに一段落つくと、人生ゲーム遊びなどもしています。1年生は漢字が読めないのが、6年生のお兄ちゃんが一緒にやってくれたりしています。

ここからは、震災のあとに、児童クラブにかかわってくださった方との活動のなかで見えた子どもたちの体と心の動きをお話ししたいと思います。ART for HOPEさんについて先ほどもお話がありましたけれども、ARTS for HOPEさんとの活動のなかでのようすをお伝えしたいと思います。私たちのところにARTS for HOPEさんが来てくれたのは5月27日でした。大きな紙に絵を描いたり、絵の具とかクレヨンとかで絵を描いて、好きに書いていくという活動だったのです。準備としては、服を汚さないように子どもにナイロン袋をかぶせたり、人もたくさん来てくれたので、「いつもと違って楽しい



ね。」なんていう雰囲気づくりをしていました。

床を汚さないように、大きなシートを敷いたのですね。その瞬間に、子どもたちのほうから、「津波」っていう声が出て、それは怖いというよりは、シートに絡まって遊んでいるという感じになっていました。私はもうただ、その「津波だよ。」っていう声を聞いただけでドキっとしてしまって、なんて答えようかなって思いながら、これは、「今のはね、今の波は優しい波だから大丈夫だよ」とか、「大人がたくさんいるから大丈夫だよ」というように、子どもたちには答えました。指導員として、子どもたちにどのように答えようかなという瞬発力を試された気持ちでした。上真野臨時児童クラブに通っている子どもたちは、たまたまみんな山側の小学校なので、津波の直接の被害は受けていないのですけれども、それでもこのように、すぐパッと津波を連想させてしまうということに、地震や津波の影響が子どもたちに随分深く入り込んでいるのだなと感じました。

先ほど、「解放とダイナミズム」という話がありましたけど、そういうなかで、こういう思い切ったプログラムができたということは、すごい気持ち良かったのですが、最後のほうには必ず、どの子も黒色が出てきてしまって、奇麗に描いた色の上を黒色でワーと塗りつぶしてしまうということがありました。

この5月下旬から6月にかけては、なんだかよく分からない不安に包まれていた時期でした。3、4年生のトラブルもとても目立っていて、兄弟同士だけでなく、友達同士でのけんかも多かったです。5月6月は、暑くなっていくなかで、長袖長ズボン・マスクをつけていなければならない。そして、放射性物質を気にして窓も開けられないし開けてはいけない。とにかく我慢を強いられることが多かったことと、暑いから脱ぎたいという単純なことができないという、いろんなことがうまくいかないことが、ストレスになっていたのかなと思います。なので、目の前を横切ったとか、にらんだとか、そういう小さなことを理由にして、たたきあいになったりとか、大きな声でののしりあいになったり。不安とかストレスを感じていました。

当時の記録をみると、「6月30日。暑いなか子どもたちは元気いっぱい。体育館を十分に使って体を動かしているところを見ると、普段の生活に我慢が

多いことを感じさせられる。そうかと思えば、指導員がいる場所に集まってきて、暑いのにみんなでかたまるようにして過ごしている。今日はそんななか、自然発生で歌が生まれ、その歌の伝播で自然とみんなが笑顔になる」。子どもたちがこうやって集まることで、それを忘れる楽しい時間に変えていくことができるということも、児童クラブの良さなのだなど、このころ思いました。

このころになると私たち指導員のなかで、夏休みをどうやって過ごそうかという不安が生まれてきました。夏休みの学校の時間帯からなので7時半からの1日保育になりますし、例年のように外遊びとかプール遊びもできませんし、学校の教室よりは、エアコンがある児童クラブ室を使ったほうがいいのではないかという考えとか。でも、そうすると体育館が使えないので、体を動かせないストレスをどのように開放すればいいのか、たくさんの不安がありました。

鹿島小学校での開設を決めたのですが、ちょうどそのときを同じくして、鹿島小学校の校庭の除染活動が始まりまして、7月28日から表土除去、校庭の土を取り除く作業を夏休み3週間ほどかかりました。この環境のなかで、1部屋で過ごさなければならないということで、このなかで子どもたちの不満が出るだろうと予想をしていました。しかし、もうこのころの子どもたちから全くそういう言葉が出なかったことに、すごく驚いてしていました。指導員としてはむしろ、子どもにわがままを言ってほしかったし、「なんで、外で遊べないの」というように、かかわってきてほしかったのです。子どもたちに我慢する癖がついているというか、みんなもこうしているのだから、目の前が確かにこの状態なの



校庭の除染事業



で、言ってもしょうがないという気持ちがあったのか、あきらめの気持ちがあったのか、つまらない夏休みのはずなのに、その生活に対する不満が全く出なかったということに、大人にも気を使っているのではないかなと感じるくらいでした。

そのようななかで児童健全育成推進財団さんと、こども未来財団さんと、植木先生のほうからアートオフィスポカポカさんの「風のカーニバル」というコンサートのプレゼントの話がありました。この日を迎えるために、ポスターとかチケットとかを子どもたちと一緒に作るという目標ができましたので、夏休みの1日生活をどうしようかなという不安をこういうポスター作りとか、集団活動として、午前や午後に入れることができ、不安だった夏休みもリズム感のある生活として送ることができました。当日も、このポカポカさんと一緒に歌って踊って、子どもたちも私たちも、市役所の方も、保護者さんも、ほんとうに一体になることができました。

この日の8月19日は夏休みの最終日で、子どもたちはほんとうにこの日まで、1部屋で思い切り体を動かすこともできないし、一応、「人が狭いなかにいっぱいいるから、静かにしようね」などと言いながらの生活だったので、ほんとうに大変だったと思うのですが、不満も言わずにいたのですね。でも、この日、大きな声を出してコンサートで一緒になって踊ったり歌ったりしているうちに、我慢の限界が来たというか、もう抑えていたものが、「パッ」と外れた瞬間があって、「キヤー」とか「ギヤー」とかっていう、子どもたちが大声を出すことが止まらなくなっていました。指導員としては、たくさんの方の大人の方も来てくださっているし、もう子どもたちの止まらないようすを見て、どうしようかなと思ったのですけれど、ポカポカの橋井さんも、それを抑えるのではなくて、どんどんそれに音楽を乗せてくれて、子どもたちの発散したい気持ちというか、子どもたちの声をどんどん引き出してくれて、抑えていた気持ちを発散させる場所を作ってくださいました。これを見たときに、子どもたちというのは、これまでなんの文句も言わずに夏休みを過ごしてきたように見えて、やはり子どものなかには抑えていたものがあって、その発散できないものがあったのだなと気づかされました。

震災後の子どもたちは、環境の変化に夢中に対応してきて、なんだかわからない放射性物質やなんだ

かよくわからない目に見えないものへの不安があったり、なんでこんなことをしなければいけないのだという怒りがあったり、ストレスを抱えたりしていたのですが、5月・6月と過ぎるうちに、周りもみんな同じなのだという気持ちになってきたようです。7月あたりになると、もうこの生活が続くことにあきらめもあったし、もう言ってもしょうがないというようなあきらめもあったのではないのでしょうか。そうやって自分を抑えてきて、この日こうやってみんなで「ワーッ」て、声を出したり踊ったりした瞬間に、ひとときの開放感を味わって、一瞬で自分を取り戻した瞬間を見た思いがします。

### ●支援することとされること

このようにさまざまな方がかかわってくださるなかで、私が感じたことがあります。私たち指導員は、いつも子どもたちを楽しませてあげたいとか、開放感とか安らぎを与えたいなど思っているのですが、そのように子どもに適切に対応するためには、私自身が心も体も健康でないとできないことだなと思いました。今回の震災は、原発事故や次に何が起こるか分からない不安と、震災後の子どものケアをどうしたらいいのかということも分からない。自分の将来のことやこの仕事に対しても、一度3月11日で解雇されたこともありますし、この仕事を続けていけるかとか、自分の健康不安のことも考えると、押しつぶされそうになるなかで、子どもを支えなければいけないんだけど、「私のことも誰か支えてほしいよ」という気持ちが、心のなかで確実にあったと思います。そのようなときは指導員同士も、「こういうときどうするんだ」とか、「行政はどうするんだ、学校はどうするんだ」と責め合うのではなくて、「こうしたいと思うんだけどどう思いますか」って、「じゃあ、やってみましょう」、「じゃあ、こうしましょう」みたいに、前向きに支え合えるような関係が欲しかったし、必要だったなというように思います。

そのように求めていたときに、植木先生が5月11日から南相馬市の児童クラブに入ってきて、子どもたちとふれあって遊びを教えてくれたり、ふれあい方を教えてくれたりというそれだけではなくて、スーッと指導員に「頑張っていますね」とか、「子どもたちの表情がいいですね」とか、肯定して



くださる言葉を掛けてくださったということが、私たち大人心の支えになっています。児童クラブ支援というのは子どもに何かを行うものかもしれないのですが、その子を支える、その子の周りにいる大人を支えてくれる、そうやって支えてくれるものなのだと感じました。植木先生も継続的に南相馬のほうにかかわってくださっています。そうやって南相馬を気に掛けてくれている人がいると思えることが、私たち指導員の心の支えになっています。

児童クラブというのは子どもを見守る大人がいること。子どもの話を聞く大人がいることが、まずは安心条件なのかもしれないのですが、今、間借りなので、生活の予測が立たない。子どもたちが生活に予想がつかないということは大変不安につながります。なので、安心して過ごすためには安定した居場所が必要です。今は臨時児童クラブですけど、今後は専用スペースを確保していただけたらいいなと思っています。

震災があって、子どもたちは、ほんとうに強く我慢していた時期がありました。子どもたちの心に間違いなく傷をつけていると思います。それでも子どもたちは5月よりは7月、7月よりは11月。絵が再生してきたように、きちんと前を向いて生きています。それを見たときに、子どもの力というものは私たちの想像を超えていくのだと感じました。そして、どの子も必ず再生する力を持っているのだということも実感しました。私が指導員として子どもにできることは、一人ひとりの子どもの心と体の成長に寄り添って、その子のことを気に掛けながら見守ることです。しかし、それができるためには、私も支えられているのだと感じられるからできることなのですね。なので、今日こうして南相馬に心を寄せてくださっている方に、皆さんに感謝いたします。

私は、児童クラブの指導員になって7年目になります。しかし5月の再開からは、すべて新しい子どもたちとの関係作りでした。でも、その関係作りをするためには今までやってきたノウハウをもって、自分が経験していたことをやってきたということなのです。児童クラブの指導員として自分がやってきた経験は、子どもにそのまま反映されるものなので、大人のあり方は子どもにとっても重要になってくるのだと思っています。何か評価を子どもにつける立場ではないので、子どもに何かを教えるという学校の先生の立場ではありません。でも、それでも

生活に必要なことや生きる力、子どもたちが生きていくための力とかコミュニケーションを上手に身につけていくにはどうしたらいいのかと考えます。私はある意味、スペシャリストだと思っているのですが、児童クラブの指導員はなんでも屋さんで、なんでもできなければいけないのではないかなと思っています。そのような大人がたくさんいて、私もそうなりたいし、そのような大人がたくさん児童クラブの指導員になってほしい。そうした意欲のある方がなってほしいと思うし、そのようになりたいと思う人を支えるようなシステムがあればいいなと強く思うし、そのような方がいてくれたらいいなとも思っています。

確かに3月に震災があって、原発事故があって、子どもたちもいなくなったし、私も避難しました。でも、南相馬に戻ろうと思ったら今度は解雇された。もういろんなことを経験しました。でも、またこうやって児童クラブにかかわることができたことを考えたときに、折れそうになる心を支えるのは、やはり、支えてくれる人がいるということが大きかったと思います。市役所から直接、解雇の電話があって、あまりにショックが大きかったのですが、それでも、やはり私が、児童クラブとか、それまでかかわってきた児童センターにもう少し恩返しのような、いつか戻ってきたときのためにとか、子どもがいつか戻ってくるはずだと考えたときに、できることをやっていたいと思ったのです。そのときの担当係長だった横田さんに相談をさせていただきました。こういうことやってもいいですかとか、保護者さんと連絡をとってもいいですかということを相談させていただくと、横田さんに答えてもらえる。そうすると、なんだか私は横田さんに支えてもらっているのだと感じました。

そして、児童クラブが始まれば、今度は植木先生が早い段階で入ってくださって、子どもの支援の仕方とか、かかわり方とかを教えてくださいました。植木先生は毎日いるわけではないのですが、植木先生は私たちのことを気に掛けてくれているという気持ちや、「また今度、〇日に来るからね」なんて言ってもらえたりすることで、今度先生が来るときまで頑張らなきゃなっていう気持ちになりました。そういう支えてくださる人がいるのだと思える気持ちが、今の私自身の支えになっているのではないかと感じるのです。



司会 最後に、閉会のあいさつを本日の共催団体であります、みらい子育てネット・新潟の顧問の野崎幸子様よりお願いいたします。

#### みらい子育てネット・新潟からの挨拶

今日は、みらい子育てネット・新潟と新潟県立大学との共催という形で開催させていただきましたことを心より感謝申し上げたいと思います。3月11日の震災、私たちがこれまで経験をしたことのないような広い地域、大きな災害でした。被災された方は、きっと住み慣れた場所を離れなければならないという、やり場のない怒りや、それから絶望的な喪失感があったのではないかと、そのようなことを思いますと心がいっぱいになりまして、皆さんへの言葉が見つかりません。この災害、きっと本当に、果てしない時間と、それから膨大な労力を必要とするのではないかと心を痛めております。今日の南相馬からの報告というものを皆さんどのように感じられましたでしょうか。小さな子どもたちにとって、傷ついた心を自分から上手に発信するということは、なかなかできないことです。それを、このように皆さんの大きな力、そして大勢の人の支えがあって、今現在の子どもたちの姿につながっているのではないかと今日感じました。これからも皆さんのお力で、未来や希望が感じられるような子どもたち支援をどうぞよろしくお願ひしたいと思います。今日は、ありがとうございました。



新潟県立大学平成23年度公開講座  
「新潟で東日本大震災を受け止める」記録集  
平成24年3月

新潟県立大学地域連携センター  
運営委員 センター長 : 山中知彦  
国際地域学部: 小谷一明・菅井清美・田口一博  
人間生活学部: 植木信一・渡邊令子 (副センター長)  
事務局 込山敦・沼田渉





〒950-8680 新潟市東区海老ヶ瀬471番地  
TEL:025-270-1300 FAX:025-270-5173  
<http://www.unii.ac.jp/>

## 地域連携センター

---

新潟県立大学では、大学の基本理念である「地域性の重視」を追求し、地域社会に開かれた大学として、さまざまな地域連携や産学官連携の総合窓口となる地域連携センターを設置しております。

地域連携センターでは、学生と教職員が一体となって、大学がある新潟市東区をはじめとする地域住民の方々、NPO、企業、行政、他大学などと積極的に交流し、地域の活動に積極的に参加して、地域社会と密接に連携をし、地域社会の発展向上につなげていくことができると願っています。

お問い合わせはこちらまで

地域連携センター

電話 025-368-8373

FAX 025-270-5173

mail [unp@unii.ac.jp](mailto:unp@unii.ac.jp)

---